

本年お伊勢さん内宮は、御鎮座二千年の佳節を迎へられた。十八年前約十年間神宮にお仕へた者として、二千年の意義を改めて考へさせられる機会を持ち、また人にも求められて今日に至つてゐる。

もとよりその歴史・文化・信仰等の意義は、簡単に全てを言ひ尽せるものではないが、その一端の私見を茲に述べてみたいと思ふ。

神宮の式遷宮或いは大嘗祭をも制度化確立されたお方は、申す迄もなく天武天皇であられた。天皇は古事記序文に「道は軒後に敷き、徳は周王に降したまはつた聖帝。その優れ御治政数々の中に、冠位十二階の制がある。十二階位とは、明浄正直勤務追進の各語を、皇族臣下それぞれに冠位として授けられたものである。

これらの語句は、恩師谷省吾先生の既に指摘される如く、この時代、大陸思想の流入といふ趨勢の中で、おそれくは固有の道徳観念の存在と内容と

に注意を払つてをられた天皇の、それを何らかの場所において表現して、人々の注意を喚起したいといふおきもちが、この位階の名としてあらはれてきたのであらう。

すなはち明浄正直勤務追進とは、我々固有の道徳観念の存在と内容に他ならない訳であらう。

清浄と正直

一内宮御鎮座二千年に思ふ一

大宮処の気高さは、例へば平安朝一帝の都へ「清浄の身をもつて」去られた齋王群臣の中にも思はれる。かく神宮は古来、神氣満つる明く清しき聖地に鎮まり坐す。そして二十年毎の式年造替によつて、常に瑞々しい荘嚴の社殿にあつて、齋王はじめ神宮祠官の厳重なる潔斎齋戒を経た浄らなる身の中に、年中の祭儀が営々と齋行されて来たのである。

神道は殊更に明浄・清浄を尊ぶ。就中神宮に於ては、場所・建物・人・祭儀何れをとつても、今なほ確実に遵守せられてある事実を看過してはならぬ。

清(明)浄とは平たく表現すれば、すがすがしであらう。神話に於いて天照大神

の御弟須佐之男命が、八俣の大蛇退治の後、櫛名田比売を得て新居を出雲の地に求め、須賀の地に至つて「私がかんスガサガ」と仰せられた言葉である。

清浄・すがすがしは従つて、神宮悠久の歴史を鑑みつつ敢て言挙げすれば、生命の蘇り恢復に通ずる生成発展への原動力と執らへてまい。

次に多く言ふ迄もなく、古来「正直」はまさしく天照大神の御教とされて来た。中世伊勢神道の中では「神垂以折禱爲先、冥加以正直爲本」の言葉が、大神の御神託として強調せられてゐる。また三社託宣のうち、天照大神の「謀計は眼前の利潤たりと雖も、必ず神明の罰に當る。正直は一日の依恬に非ずと雖も、終には日月の憐を蒙る」とは、正色を説いたものである。

正直も清浄も、只管なる勤務追進によつてのみ保持現存されるのであり、現在ある日本人の優性はこの、勤勉さ、に象徴される。そしてこれによつてのみ将来が約束されるのではなからうか。

(神社新報)

田島放生会

去る十月一日より三日間、当大社秋の大嘗祭が盛大かつ厳肅に齋行された。秋の大嘗祭は齋祭市民に「田島放生会」として親しまれ、年に一度秋後二女神が一同に会し、神人和楽を共にする一大神事である。今年度も

も境内には多数の露店が立ち並び、秋の夜長を楽しむ老若男女よつて大いに賑わつた。

大嘗祭前日は、沖・中両宮奉賛会、地元氏子総代並びに協力会の方々の奉仕により、みあれ祭諸準備、社殿境内の装飾、幟立て等が行われ、大嘗祭を迎える準備が整つた。

三十日、午後五時より総社地主祭、同六時には秋季大嘗祭奉賛会齋行され、翌日から大嘗祭が無事に執り行われる様、祈念された。

明くる十月一日、大嘗祭の幕開けを飾る「みあれ祭」が執り行われ、今年はお風の影響があり、海上の波も高いものであつたが、午前九時三十分正時刻通り、に四白船に及ぶ大船団が大島港を航出した。玄海海上に紅白の吹き流しを懸かせ、壮大な海上神幸を約一時間繰りひろげた後、神湊港へと入港した。

沖・中・辺の三宮に鎮まり坐す三女神が一同に会し、速やかに玄海魚市場にて着座祭が齋行された。不順な天候の為、神湊港から頓宮への陸上神幸は中止とされ

たが、三宮の御座車にて同所より辺津宮へと神幸、花火が盛大に打ち上げられる中無事入御された。

秋の涼しさが感じられる中、午前十一時秋季大嘗祭二日祭が齋行された。神前に和祈、荒稲、神酒や海川山野の種々の神饌、また崇敬者の方々の寄附せられたお供物が並べられ、県神社庁宗務部長大塚信氏による郡内神職奉幣の後、宮地嶽神社祓部齋祭場神祇官、氏子奉幣使山本利一氏(赤間)による奉幣詞奏上が行われた。続いて喜多流梅津忠氏が当神玉の翁面を着し、多くの参拝者が見守る中奏舞された。雅びやかな舞を披露した。

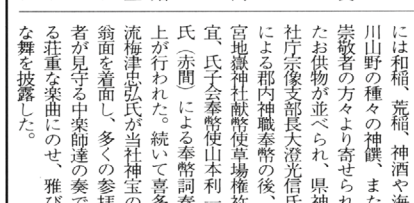
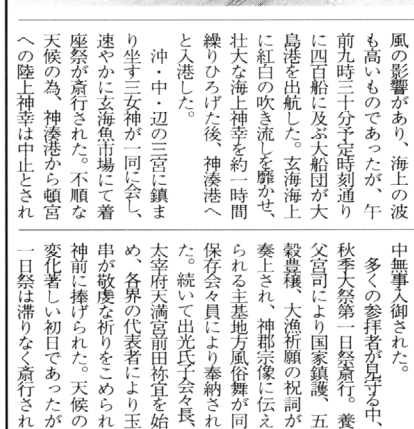
大嘗二日目は好天に恵まれた。秋の涼しさが感じられる中、午前十一時秋季大嘗祭二日祭が齋行された。神前に和祈、荒稲、神酒や海川山野の種々の神饌、また崇敬者の方々の寄附せられたお供物が並べられ、県神社庁宗務部長大塚信氏による郡内神職奉幣の後、宮地嶽神社祓部齋祭場神祇官、氏子奉幣使山本利一氏(赤間)による奉幣詞奏上が行われた。続いて喜多流梅津忠氏が当神玉の翁面を着し、多くの参拝者が見守る中奏舞された。雅びやかな舞を披露した。

三日、午前十一時より総社祭を齋行、玄海中学校女生徒四名により浦安舞が奉仕された。浦安舞が神前に奉納された。十二単衣装に扇と鈴を持ち優雅に舞う姿を、参拝者は静かに見入つた。

総社祭に引き続き、宮二日祭が齋行された。多数の遺族会々員、県議、市町村長等が参列し、当社巫女おこつた参拝者の歓声に満ち、無事盛大に終了した。

かくして三日間に亘る田島放生会(秋季大嘗祭)は、神人和楽の和やかな一刻をおこつた参拝者の歓声に満ち、無事盛大に終了した。

長い階段状の丸屋根のトンネルの墓道を下つて行くと、ドーム状をしている石室へと到着。古墳の内部の壁が石積みの物と、レンガ造り物との二種であった。各々石室の壁面には生活の模様を表した絵を描いた、いわゆる装飾古墳である。石室は正室と副室に分かれていて、死者を埋葬する正室(奥室)の前はロビー状に空間を作り出し、左右に副葬品を埋納する部屋(前室)がある。右側が左側か一室の所もある。石室の天井は各々が時代によ



中国調査紀行(18)

一話 (55)

樂 忞 子

約一時間ばかり馬車に乗り高島古城を巡視して、入り口へと降り着く。一人あたり十元であった。古城をあとにして一路トリアン市内へと行く。この辺りは小川が流れ、各所に小さな家々がたまりをみせ、部落をつくりつてゐる。さすが砂漠のオアシス帯である。小川では水溜り場で洗濯をし、子供達は水浴びをしてゐた。またこの地方で産する小形の牛馬であるが、これも一緒に水浴である。大変な賑わいの場を所々でパスの窓から覗き見かけしつゝ見ることが出来た。

古城からちょっと行くとやはり火焔山の山裾であるが、アスダ那(アスター)古墳群へと到着する。古墳群は、西晋時代から王國が乱立す五胡十六国(三六世紀)からはじまり、中国を統一した唐王朝の盛唐期(七世紀中葉頃)までの三期にまたがっている。地表には小さな墳丘をもち、地下式石室の墳墓である。二三ヶ所開口しているのが古墳の中に入ると、

石窟は中央に柱を立て、周囲の壁には仏の像を彫く、中にウイグル族の人々のくらしの模様を配している。いわゆる甕竈同様式と呼ばれる生活の祈りの様である。全て終了である街の中心の「吐魯番古館」へと到着。二十時というのにまだまだ外は明るい。なんとも書くようだが、日本からだいぶ西にきてはいるためにまだ日が沈むまでには間がたどり、ようやく中心街にたどり着き、道路も簡易ではあるが舗装してある道へと入つた。おもしろいことには街路樹は葡萄である。道路は葡萄に覆われ葡萄並木であり、葡萄トネルであった。これから、全市を葡萄園にしていくとガイドの人が話してくれた。もちろん今もこの特産物はブドウ、色であり、干ブドウ作りの乾燥小屋が多く建っている。小屋の二階は交互に組み合せた干し室とされていた。

〔ご案内〕 十一月の各神賑行事

第二十六回 西日本菊花大会

全国的に活目を集める西日本地区を代表する菊の祭典西日本菊花大会は、本年も宗像大社境内特設会場に於て開催される。

本大会は、福岡県内各地はもとより、大分、佐賀、長崎、熊本、宮崎、鹿児島、山口県各地から、代表的菊花製作者が丹精込めて作成した菊花約三〇〇鉢が一堂に会し技を競う。

尚、全菊連全国大会が平成十一年に当地で開催されることに伴い、本年度より切花、福菊、盆栽、鉢競技九州、山口大会が開催されます。ご家族お揃いで是非ご観覧下さい。

期日 十一月一日～十一日
月 十三日迄
会場 境内全域(展示ハウス百余棟)

表彰式 十一月十七日

第二十四回 秋季奉納盆裁展

宗像地区盆裁愛好家の集り、宗像大社盆裁協会、会長森谷昭広を総裁し、春秋と年一回盆裁展を開催しています。

秋の盆裁展は、春の盆裁展が華月と藤し花物を中

期日 十一月三日
試合 午前九時より
会場 本殿横境内
(雨天の場合は玄海少年自然の家)

秋の盆裁展は、春の盆裁展が華月と藤し花物を中

第二十五回 献詠短歌大会

福岡県内を中心に短歌愛好者が、この大会を通じて互いに交流しつつ、切磋琢磨し日本文化の護持と高揚に寄与することを目的として開催されるもので、著名な斯界指導者の先方を選手としてお招きし、講師、指導を受ける共に、参加者相互による批評、感想等を発表するユニークな大会として好評を得ています。

期日 十一月九日
開始時間 午前十時より
会場 清明殿

期日 十一月九日
開始時間 午前十時より
会場 清明殿

第二十六回 宗像大社本因坊戦

宗像市郡より、アマチュア囲碁棋士百余名参加し、宗像地囲碁実力ナンバーワンを決める大会で、四段以上の実力者による本因坊戦と、一般参加者による有段者の部とが交互に行われ、盤上での熱戦が繰り広げられます。

期日 十一月九日
開始時間 午前十時より
会場 清明殿

期日 十一月九日
開始時間 午前十時より
会場 清明殿

第二十七回 奉納柔道大会

宗像市郡内中学校一、二年生約七十名が出場、新人戦を兼ねて母校の名譽と日頃の練習の成果を發揮せんものと対戦、手に汗に涙の奮戦が行われます。

期日 十一月九日
試合 午後七時より
会場 本殿横境内
(雨天の場合は玄海中学校武道場)

期日 十一月九日
試合 午後七時より
会場 本殿横境内
(雨天の場合は玄海中学校武道場)

第二十八回 奉納演武会

宗像地区の少年拳士、大学生、一般拳士百余名が参加、日頃の修練の成果を神前に奉納します。

期日 十一月十七日
会場 本殿横境内(雨天の場合は中止)

期日 十一月十七日
会場 本殿横境内(雨天の場合は中止)

第二十九回 奉納演武会

宗像地区の少年拳士、大学生、一般拳士百余名が参加、日頃の修練の成果を神前に奉納します。

期日 十一月十七日
会場 本殿横境内(雨天の場合は中止)

期日 十一月十七日
会場 本殿横境内(雨天の場合は中止)

第三十回 奉納演武会

宗像地区の少年拳士、大学生、一般拳士百余名が参加、日頃の修練の成果を神前に奉納します。

期日 十一月十七日
会場 本殿横境内(雨天の場合は中止)

期日 十一月十七日
会場 本殿横境内(雨天の場合は中止)

第三十一回 奉納演武会

宗像地区の少年拳士、大学生、一般拳士百余名が参加、日頃の修練の成果を神前に奉納します。

期日 十一月十七日
会場 本殿横境内(雨天の場合は中止)

期日 十一月十七日
会場 本殿横境内(雨天の場合は中止)

第三十二回 奉納演武会

宗像地区の少年拳士、大学生、一般拳士百余名が参加、日頃の修練の成果を神前に奉納します。

期日 十一月十七日
会場 本殿横境内(雨天の場合は中止)

期日 十一月十七日
会場 本殿横境内(雨天の場合は中止)

秋の交通安全キャンペーン実施

今年も秋の交通安全キャンペーンが九月十五日、宗像市二部九に於て行われた。

当りでも、神職一名巫女三名が同し、宗像警察署宗像交通安全協会、宗像地区の市町村と協力し、ドライバール等、交通安全を呼びかけた。

今年も「ゆずりあい、思いやり、みんなで作る交通安全」を交通安全運動のキャッチフレーズに掲げ、高層の交通事故防止の一

トベルトの着用徹底を重点にキャンペーンを展開した。当日、午前十一時より旧国道二号線沿いに設けられたセーフティステーションで、宗像警察署長、署員、交通安全協会関係諸団体と一緒に、シートベルト着用の指導や安全運転を呼びかけるチラシに乳酸飲料と当り社のお守り、ステッカーを配布、「安全運転をお願いします」とドライバール等一人一人に訴えた。

者等は、最初は交通違反の取締りと思いき、緊張した面持ちで接していき、安全運転のチラシやお守りが手渡されると交通キャンペーンとわかり、ホッとした表情を見せていた。

今は車もコンピュータ化し、交通事故に対する装備や性能面でも進歩しつつあるが、運転するのは我々自身である。万一の事故時の被害軽減の上でも、シートベルト着用を習慣づけて、安全運転心がけしてほしい。

警署に止められた運転



稲穂重く豊作の喜び

白風の害も無く、実りの秋、収穫の秋がやってきた。秋祭も終り、境内前に広がる黄金の波も目毎に切り取られて行く、畦道にすだく秋虫の鳴き音も一段と大きく聞かされる。

神郡の水田は今が一番美しい。今年も宮御鎮座二千年を祝う年である、今年始めに神宮神田から新田種米「イセヒカリ」が収穫され、神前に供えられ、神宮だよりにはこの慶びを、倭姫命が定められ

慶びを、倭姫命が定められ

責任役員 占部文男氏逝去

宗像市役員占部文男氏(八十二才)が十月七日早逝された。氏は大正四年七月二十六日に地元玄海町田島の占部要一氏の長男として生を享けられた。当大社の境内を庭の様に成長され、父要一氏も永年に亘り氏子会々長を務められた代々の敬神の念厚き家庭である。

宗像中学(現宗像高校)卒業後、軍隊生活五年を終り、福留原に就職された。三十七年間勤務され農政課産業が発達した日本である、今取り入れ待った黄金の波を虫音を聞きながら夕日の中に見る時神恩に感謝し、明日を迎える力を神に祈る気持がわいて来る。当社神田には刈取られた稲が竹竿の上に「イナギカケ」してある。

稲穂を脱穀した後ワラを縄に使用する為である。稲穂の収穫方法も時代変化に伴って現代ではワラはコンバインで刈取られる。神事に欠く事の出来ない、稲用ワラを入手する事は大変困難な現状である。新嘗祭(十月十三日)に新米を神前に供し、新ワラで縄を作り新年を迎える喜びを知る年中行事は大切である。毎年に少なくなくて行く。

米づくりの原点を忘れてはならない。

長を最後に退職された。昭和六十一年、田中富樹氏の後任として、当社責任役員に就任され、氏子会副会長にも就かれた。以来十年、率先して総代奉仕、氏子会運営に携わられた。又昭和天皇御在六十年記念事業には多額の浄財を奉納されるなど、神徳発揚に多大の功績をのこされた。ここに占部文男氏の御逝去を悼み、謹んで御霊の御平安をお祈り申し上げます。

宗像市役員占部文男氏(八十二才)が十月七日早逝された。

氏(八十二才)が十月七日早逝された。

氏(八十二才)が十月七日早逝された。

社務日誌抄

- 九月一日 月次祭
- 九月四日 アポロサービス(福岡営業所)社長山田孝夫氏他一名来社
- 九月七日(株)グリーンクロス代表取締役社長青山明氏他二名参拝
- 九月七日(株)グリーンクロス代表取締役社長青山明氏他二名参拝
- 九月八日 菊会理事會
- 九月九日 宗像市隣接寺区「歴史を知る会」二名来社
- 九月十一日 宗像大社秋季大祭打合せ四者会談
- 九月十二日 宗像郡連誼會
- 九月十三日 宗像大社氏子会総代総会
- 三島光隆(代表取締役)社長三島聰信氏他七名



- 参拜 福岡第六学区高校新人 教諭二名来社
- 九月十四日 沖津宮神饗迎
- 九月十五日 月次祭
- 九月十八日 田島地区老人クラブ一〇〇名清掃奉仕
- 九月二十三日 皇靈殿遷拜式
- 九月二十四日 宗像記者クラブ秋季大祭報道説明會
- 九月二十五日 宗像警察署交通安全キャンペーン 神職一名巫女三名出向
- 於三郎丸
- 宗像郡玄海町戦没者慰霊祭
- 玄海町消防団秋季大祭 警備打合せ
- 九月二十六日 奉納盆裁展 役員会
- 福岡県トラック協会福岡分会(〇名)参拝
- 九月二十八日 城山興産(株)福岡営業所城山に登るう会四〇名参拝
- 地元総代並協力会秋季大祭諸準備奉仕
- 九月三十日 秋季大祭総社 地主祭・宵宮祭
- 神社本庁教部局報課 録事瀬尾友也氏並パンミイト時宗氏他一名
- みあれ取材の為来社
- FBS福岡放送ズームイン朝ディレクター副島浩氏みあれ取材の為来社
- 石川県立歴史博物館学芸主任本康右氏来社
- 九州通商産業局長井田敏氏参拝

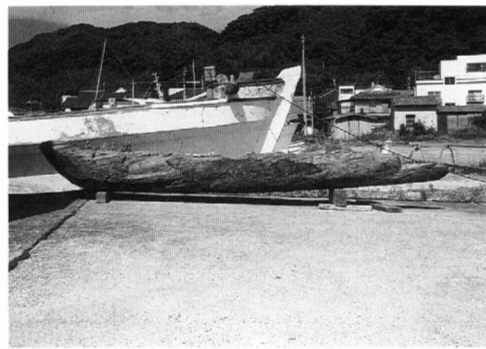
宗像大社歌会
俳句作品集 四〇三

福間 森 清
高低のあれと稲穂の揃ひけり
津屋崎 井浦 良介
秋風より高く乾れし鳥賊のれん
自由ヶ丘 細川 絹子
かばひ谷の渡る吊橋秋の風
若松 高橋 忠實
故里の鎮守の祭りが懐かしや
日里 花田いつ枝
身繕ふ胸に色なき風の波
福岡中央 山下しづえ
風鈴がかほそくなりて
萩の花
藤沢 井上 玄洋
秋風や浜の人の夢の跡
東郷 吉武 涌泉
雲遊ふ四つ塚連山夏深し
東郷 中野 きみ
晩夏光仕事にのびる影法師
東郷 吉田 鈴子
朝市の込みで晩夏の船溜り
東郷 吉田 杏子
野の道を歩くや晩夏の風の
東郷 三浦三千代
ひまわりの背なにかげりや
晩夏光
東郷 有吉里智子
アトラク終りて静か晩夏
東郷 田中 雨葉
一羽翔らみな飛鳩や晩夏
東郷 大原 房子
弧を画き波打ちる暁晩夏

(続) 浜の寄物

111

前里賀の島に丸木舟が漂着したところについて触れたい。
漂着した丸木舟は造船所近くのコンクリートの船揚げ場に置かれていた。残存長四メートル五センチ、軸



漂着した丸木舟

川崎製鉄の一種子島の丸木舟では種子島の丸木舟は約六・四メートル(二一尺)は、海の波長から割り出された長さというから、仮に全長六・四メートルだとすれば、後部約二メートル余りが切れて失われたことになる。ただ種子島の丸木舟という根拠はない。舟の表面は樹皮を剥いだ程度で、加工されたり調整されたような跡は見えない。舟の横断面はU字型を呈し、底面は平たくなっている。舟の舷の幅は七センチほどである。底面には手斧で削り抜かれ、斧の跡が残っている。削りは荒いように感じられたが、平らにされている。全体に薄くミドリほどの小さなフジボが付着している。(船首)の部分は年輪が見られ、木の芯を中心に



川崎製鉄の一種子島の丸木舟

おいで造られていることがわかる。後部のきた部分は、故意に切断したのではなく、漂流中に船殻のスクリーナーにまきこまれて切れたように見える。材質については、引き揚げられた丸木舟のそばに、同舟の木片があったので持ちかえり、愛媛大学の原田先生に舟の写真も添えて鑑定を依頼して、私の見た感じはスギ材のように見えた。ラフ材等の南方材ではない。種子島の丸木舟は、ヤクタンゴマツが使用されていたという。トカラ列島の中之島ではローソクノキである。

他の漁船のじやまになるため沖に捨てられたのではないかと。志賀島のあるは志賀島の漁港近くの海中に昔から埋もれていたのを掘り出したもので、材質はモミノキ時代は鎌倉時代頃のものであるという話も聞いたが、根拠もなくややおかしい。長期間泥中であつた状態である。

二ヶ月くらいで、四、五月頃には着きが多いという。約二ヶ月程度漂流。短期間海を漂っていたことは間違いない。もうすぐ材質の鑑定も丸木舟ではつづりよう、丸木舟が漂着した前月、志賀島の勝馬浜にも一つ不思議な舟が漂着したのである。

金半露半露天にそえなられた品々
前号では伝沖ノ島出土「金銅高機」といわれていたが、今回は関連する「糸紡ぎの雛形品」について記していく。
金属製の雛形紡織関係品が奉納されたのは、沖ノ島祭祀では七世紀後半代頃の祭りからである。丁度その時期にあたるのは岩陰祭祀の終末期ともいえる23号の祭場である。いづれも小形品であるが、糸紡ぎ関係の一連の雛形品が出土している。これらは薄い銅板だけの物や、銅板に若干の鍍を施してある物もあるが、全て切り金銅の品々である。

伊勢大神宮神玉、千一連の中には、員数と重量が記されている。銅多々利(たたり)二基、高一尺二寸六分、土居径三寸六分。金銅簀竹(かせい)二寸一分。金銅簀竹(かせい)二枚、長各九寸六分、手長五寸八分。金銅錘(つむ)二枚、長各九寸三分、輪径一寸一分。

同型ではあるが材質が異なる銀銅製も同様として記されている。いま伊勢神宮に保存されている金銅製の櫛(高三十一・五センチ)・杵(長二十九・一センチと二十六センチ)と同類の物を三重県神島の八代神社神宝の中でみることが出来る。櫛(高十九・三センチ)と杵は(長二十センチと十六・〇センチ)大小二個である。神宮よりも小形の品ではあるが厚味を持つ銅製品で、雛形としては伝沖ノ島金銅高機と同様に充分実用にも耐える品である。この八代神社の櫛と、形と厚みと類似品の銅製櫛(現長十四・八センチ)が伝沖ノ島出土品として現存している。

宗像むかしばなし
藤原広嗣と千疋原

宗像連山の山間を抜けて垂見峠が玄海町の吉田部落に通じる道は昔からの官道であった。遠の朝廷といわれた本府から京の都にのぼるには、この道が長く使われたのであった。この垂見峠からの道筋に千疋原という所がある。

守から本客の小式におとされたのである。天平十二年(740)藤原朝は朝廷と真備とを除くようこの文を差し出すと共に、大宰府で兵を挙げ、遠賀の郡家に移り、陣営を設け国内の兵や牛馬を焚くのである。各地から多くの兵や牛馬が集められて、これらの駐屯地として近隣の要害地で飼料の豊富な場所が求められた。そして恰好の地として孔大寺山の麓の草原が選ばれた。

山頂より一陣の風が兵營に吹き始め兵達はその気につかれたように深い眠りにおちてしまった。一夜明けて兵士達はほとほと千余頭の牛馬が全てを折り曲げられたように息絶えていたのである。一様な死に方から、これは毒物によるものでなく、祟りに違いないと噂されこの話は直ちに広嗣のものにもたされた。広嗣は一笑に付た。流行病に違いないというところを打つてしました。しかし、兵達の間には動揺が起つた。或る者は郷里を目指し、ある者は武器を投出し、逃散してしまつた。

かくて孔大寺山麓の一軍は戦力を失つてしまつたのである。広嗣と東人との闘争は、初戦は皆仰つていたが、広嗣の軍勢の中に途中で戦いを放棄する者も多くなつたため次々と敗退していった。広嗣は遠賀の郡家から志賀の島まで落ちた。船で避難し、捕らえられて斬首の刑に処せられた。人々は広嗣の怨霊である。人々は広嗣の怨霊の仕業であると噂し、田畑となり果実な土が良質な穀物、豊美な土が良質の織物として姿を表して

織機関係としての成(おさ)や刀杆(とうじよ)と

同型ではあるが材質が異なる銀銅製も同様として記されている。いま伊勢神宮に保存されている金銅製の櫛(高三十一・五センチ)・杵(長二十九・一センチと二十六センチ)と同類の物を三重県神島の八代神社神宝の中でみることが出来る。櫛(高十九・三センチ)と杵は(長二十センチと十六・〇センチ)大小二個である。神宮よりも小形の品ではあるが厚味を持つ銅製品で、雛形としては伝沖ノ島金銅高機と同様に充分実用にも耐える品である。この八代神社の櫛と、形と厚みと類似品の銅製櫛(現長十四・八センチ)が伝沖ノ島出土品として現存している。

宗像連山の山間を抜けて垂見峠が玄海町の吉田部落に通じる道は昔からの官道であった。遠の朝廷といわれた本府から京の都にのぼるには、この道が長く使われたのであった。この垂見峠からの道筋に千疋原という所がある。

守から本客の小式におとされたのである。天平十二年(740)藤原朝は朝廷と真備とを除くようこの文を差し出すと共に、大宰府で兵を挙げ、遠賀の郡家に移り、陣営を設け国内の兵や牛馬を焚くのである。各地から多くの兵や牛馬が集められて、これらの駐屯地として近隣の要害地で飼料の豊富な場所が求められた。そして恰好の地として孔大寺山の麓の草原が選ばれた。

山頂より一陣の風が兵營に吹き始め兵達はその気につかれたように深い眠りにおちてしまった。一夜明けて兵士達はほとほと千余頭の牛馬が全てを折り曲げられたように息絶えていたのである。一様な死に方から、これは毒物によるものでなく、祟りに違いないと噂されこの話は直ちに広嗣のものにもたされた。広嗣は一笑に付た。流行病に違いないというところを打つてしました。しかし、兵達の間には動揺が起つた。或る者は郷里を目指し、ある者は武器を投出し、逃散してしまつた。

かくて孔大寺山麓の一軍は戦力を失つてしまつたのである。広嗣と東人との闘争は、初戦は皆仰つていたが、広嗣の軍勢の中に途中で戦いを放棄する者も多くなつたため次々と敗退していった。広嗣は遠賀の郡家から志賀の島まで落ちた。船で避難し、捕らえられて斬首の刑に処せられた。人々は広嗣の怨霊である。人々は広嗣の怨霊の仕業であると噂し、田畑となり果実な土が良質な穀物、豊美な土が良質の織物として姿を表して

織機関係としての成(おさ)や刀杆(とうじよ)と

同型ではあるが材質が異なる銀銅製も同様として記されている。いま伊勢神宮に保存されている金銅製の櫛(高三十一・五センチ)・杵(長二十九・一センチと二十六センチ)と同類の物を三重県神島の八代神社神宝の中でみることが出来る。櫛(高十九・三センチ)と杵は(長二十センチと十六・〇センチ)大小二個である。神宮よりも小形の品ではあるが厚味を持つ銅製品で、雛形としては伝沖ノ島金銅高機と同様に充分実用にも耐える品である。この八代神社の櫛と、形と厚みと類似品の銅製櫛(現長十四・八センチ)が伝沖ノ島出土品として現存している。

伊勢大神宮神玉、千一連の中には、員数と重量が記されている。銅多々利(たたり)二基、高一尺二寸六分、土居径三寸六分。金銅簀竹(かせい)二寸一分。金銅簀竹(かせい)二枚、長各九寸六分、手長五寸八分。金銅錘(つむ)二枚、長各九寸三分、輪径一寸一分。

同型ではあるが材質が異なる銀銅製も同様として記されている。いま伊勢神宮に保存されている金銅製の櫛(高三十一・五センチ)・杵(長二十九・一センチと二十六センチ)と同類の物を三重県神島の八代神社神宝の中でみることが出来る。櫛(高十九・三センチ)と杵は(長二十センチと十六・〇センチ)大小二個である。神宮よりも小形の品ではあるが厚味を持つ銅製品で、雛形としては伝沖ノ島金銅高機と同様に充分実用にも耐える品である。この八代神社の櫛と、形と厚みと類似品の銅製櫛(現長十四・八センチ)が伝沖ノ島出土品として現存している。